

地域情報（県別）

【茨城】「医師として当たり前のことをしただけ」赤ひげ大賞受賞者の思い-鈴木直文・慈泉堂病院院長に聞く◆Vol.1

2021年3月19日 (金)配信 m3.com地域版

地域医療に尽力してきた医師を表彰する「日本医師会 赤ひげ大賞」第9回の受賞者が1月に発表され、茨城県からは「慈泉堂病院」（大子町・だいごまち）の理事長・鈴木直文氏が選ばれた。「医師としてただ当たり前のことをやっただけ」。鈴木氏は率直な感想をこう話す。24時間の救急体制や在宅医療の実施、介護機能の充実化などの取り組みは今でいう「地域包括ケアシステム」の構築を目指す先駆的なものだった。病院の変遷を追った。（2021年2月16日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)

——赤ひげ大賞の受賞、おめでとうございます。まずは感想をお聞かせください。

率直に言うと、受賞の知らせを聞いたときは「どうして？」という気持ちでした。私は何か手に技をもって特別なことをしたわけではなく、日々、当たり前のことをしてきただけです。「なぜ自分が…」と。

気持ちに変化が現れたのは、周囲から「おめでとう」と言われるようになってからです。最初に電話をくださったのは、私の母校である聖マリアンナ医科大学でお世話になった御年80代の先生でした。その方は今では同大で理事を務められていて、「おめでとう。理事会には私から言うておくからね」と優しい言葉をかけてくださいました。

ほかにも遠い昔の恩師や友人・知人、メディアのニュースなどで知ったのか、患者さんまでお祝いの言葉を寄せてくださいました。そんなことがあり、時間がたつにつれて「これはすごいことなんだな…」と実感するようになるとともに、うれしさや気恥ずかしさも感じるようになりました。



理事長の鈴木直文氏

——茨城県医師会が先生の活動を評価して日本医師会に推薦した結果、受賞が決まりました。先生が活動を行ってきた大子町はどんな地域なのでしょう。

大子町は茨城県の北西端に位置しており、北は福島県、西は栃木県に接しています。南北に長い町の面積は約326km²と広く、県全体のおよそ20分の1を占めます。周辺の大きな地方都市である茨城県水戸市、日立市、栃木県大田原市、福島県白河市には車で1時間以上もかかるため、地理的にはある意味で隔絶された町と言えるでしょう。

多くの地方と同様に大子町も人口減少と高齢化が著しく、2021年1月現在の人口は約1万5000人であり、高齢化率は46.9%と全国平均の28.7%（2020年9月現在）を大きく上回ります。

——続いて、病院の概要をお聞かせいただけますか。

当院が開院したのは1989年で、現在は48床を備える二次救急協力病院です。標ぼう科目は内科、外科、整形外科、胃腸科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、泌尿器科、肛門科、婦人科、麻酔科で、1995年からは在宅医療も行っていきます。1日の来院患者数の目標は150人で、現状は100人を少し超えるくらいでしょうか。在宅医療では実件数として月に100人ほどを訪問しています。地域の高齢化に伴って患者さんの年齢も高くなっており、現在は80代以上が中心ですね。

法人に在籍するスタッフはおよそ190人で、うち医師は30人ほど。常勤医は私を含めて4人です。

——1989年に開業したとのことですが、先生はもともと開業志望だったのですか。

いえ、そうではありませんでした。私は大子町から北に少し離れた福島県塙町の生まれで、医師家系の4代目でした。初代から父まではそれぞれ別の地域で診療所を運営していましたが、父がこちらの病院の前身である慈泉堂医院を買い取ったのです。本当は父自ら経営したかったのかもしれませんが、彼も大子町の北に接する福島県矢祭町で診療所を営んでいました。それで、私が病院の担い手と呼ばれたわけです。

当時の私は医師になって10年目。特別な手技などありませんでしたが、「医師としてどの程度通用するのか試してみたい」と淡いチャレンジ精神のようなものはありました。大子町は医師の少ない医療過疎地とも聞いていたから、「私のことを必要としてくれる患者さんがいるなら」と開業を決意し、院名を改めて開院しました。

——それから、病院長として診療を続ける中で病院の機能を拡充してきたのですね。

はい。開院した日はいづらか期待して「患者さんはいらっしゃるかなあ」とお待ちしていましたが、結果は2人でした。病院内には職員の方が多く、いづらじっくりと診ても2人で2時間です。これは恥ずかしかった。2日目が4人、その次の日が8人でした。「このままいったらどうなるんだろう」と不安な思いもしましたが、「患者さんはそう簡単には増えない」という現実を知れたのは良かったことかもしれません。

そんなふうには立ち上がりはそう良くはなかったものの、徐々に患者さんが増えてきて、3、4年もすると地域の方に必要とされる医療の形も見えてきました。それで、「救急医療体制の充実」と「生活習慣病に対する診断・治療技術の向上」、「高齢者の健康管理と推進」を3本柱として今までやってきた次第です。

具体的には、救急患者さんを土日祝日を含めて24時間受け入れ、当時はまだ周辺の医療機関にはなかったCTを導入、やがて病院のそばに介護老人保健施設「やすらぎ」を開設しました。同じ名で訪問看護ステーションとヘルパーステーションも立ち上げました。

◆鈴木 直文（すずき・なおぶみ）氏

1979年聖マリアンナ医科大学卒。1986年同大学院修了。聖マリアンナ医科大学病院勤務などを経て1989年に慈泉堂病院を開院した。1996年に医療法人聖友会を設立、理事長に就任。24時間の救急対応や在宅医療、介護機能の充実化などに取り組み、地域医療に尽力してきた。2021年に第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞。専門は消化器外科と内分泌疾患。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

